

# 子どものための音楽遊び ～ピアノと戯れよう～

仁愛女子短期大学 准教授 木下由香

## ◆講座要項掲載内容◆

子どもは、遊びを通して色々なことを学び、成長していきます。ピアノというと、少し敷居が高いというイメージがありませんか。今回は、ピアノを使って、大人から子どもまで誰でも出来る簡単な遊びを、一緒に考えていきましょう。また、それらを使った即興演奏も試みてみたいと思います。

## ◆開催日時◆

平成 24 年 9 月 8 日(土) 13:30 ～ 15:00

## ◆開催内容◆

### 1. はじめに

保育の現場でピアノはどのように使用されるのかと考えたとき、歌唱活動をする際のピアノ伴奏や、手遊びやリズム遊びといった音楽にあわせた身体運動としてのリトミック活動、「気をつけ、礼」の合図などが頭に浮かびます。ピアノ演奏に慣れた保育士が担当することが多いようですが、もっと手軽にピアノを使った遊びを保育の現場でも展開できたら楽しいのではないかと考えました。なおかつ、子どもたちの感性を育むことに繋がればこんな嬉しいことはないと思いませんか。

### 2. ハンガリーのピアノ教育の紹介

世界にはダルクローズ、オルフ、コダーイらが提唱した音楽教育があります。今回は、コダーイ・システムを基盤とするハンガリーで行われているピアノ教育について2つ紹介させていただきました。

#### 【1】クルターク・ジョルジイ(1926～)『遊び—ピアノのために』1979年出版

ハンガリーにおける前衛音楽の先駆者であり、主導的な作曲家であるクルタークは、ピアノを学ぶ第一歩として、

大胆に音を出し、全鍵盤の上を走りまわるようにして弾く、つまりピアノを弾く喜びや動くことの楽しさを味わうことから始めようとしています。

下記にお見せするのは、五線譜上にまるで絵描きをしたかのような図形楽譜です(図1)。演奏には細かい指の運動は要求されず、「クラスター」や「グリッサンド」をふんだんに使った奏法が用いられているのが特徴です。そして、それらの曲の中には、形式や構造、響きや静寂などが盛り込まれ、演奏者自らがイメージを膨らませて表現することができます。

(図1)



#### 【2】アバジ・マーリア『ピアノの夢—創造的なピアノ学習』2008年出版

1964年にハンガリーのペーチ市リスト・フェレンツ音楽院音楽教員養成科を卒業したアバジは、絵画・建築・文学・数学などを総合して、ピアノに限らず自然や人間のすべての事象に共通する側面を理解することからピアノ教育を始めることを提唱しました。もっと分かりやすく言うと、森が木々で成り立ち、その木が根や茎、枝、葉などで成り立っているように、音楽もメロディー、リズム、ハーモニー、形式といった様々な構成要素で成り立っていることに着目しています。また、明暗や強弱、長短といった対比や、朝昼晩、春夏秋冬といったサイクルなども含みます。そして、応用としてこれらの要素を総合的に取り入れ

た即興を重視しているのが特徴です。関連性を発見すること、感じる事が大切であり、それらをピアノを通じて創造的な音楽表現として実現させることが、引いては子どもたちの中に創造的な人間の考え方を形成することになると述べています。



クルタークやアパジのピアノ教育は、日本にいる我々には斬新で奇抜と感じるかもしれません。しかし、ハンガリーの音楽教育は、民謡を使った歌唱活動を中心にソルフェージュ能力を養い、良い耳を持った国民を多く育てる目的で行われているからこそ、このようなアプローチ法が生まれたと言えるでしょう。

### 3. ミニワーク

当日は、35名の申込者のうち34名の福井県内の保育者たちが参加してくださいました。6グループに分かれて、テーマを決めていただき、グループで短いストーリーを考え、2分以内で発表をしてもらいました。以下、各グループの発表テーマです。

第1グループ《宇宙への探索》

第2グループ《動物園》

第3グループ《感情》

第4グループ《季節》

第5グループ《天気》

第6グループ《誕生》



第6グループが制作した《誕生》の楽譜例を挙げたいと思います(図2)。本来、楽譜は演奏を記録するために生まれました。参加者のインスピレーションがストーリーのメモと共に記されています。

(図2)



### 4. おわりに

今回のワークショップでは、ピアノ経験を問わず、誰にでも取り組める内容を扱いました。グループワークでは、初めて顔を合わせる参加者が、それぞれのテーマに基づいて相談していくにつれ、和気あいあいと活発な意見交換が行われていました。また、発表に際して積極的な姿勢がみられたのは大変良かったと思います。90分という短い時間にも関わらず、音の高低、大小、長短といった対比を上手く用いて、テーマの情景・状態が表現されたグループが多かったと思います。これまで私たちが学んできた「楽譜を正確に読む力」だけでなく、柔軟な想像力が求められ、子どもたちにもそれらを伝えていくことの大切さを感じていただきました。

幼児期はまず自己表現能力を身につけることが重要です。そういう意味で、自由な創作活動を行うことは大変有効であると思われます。「まずは実践、それから理論へ」と教育現場ではよく耳にする言葉ですが、即興演奏ができるようになることは、全体の構造から音楽を組み立てていく作業であり、楽曲をより良く理解できることに繋がると思います。今後は、実際に幼児対象のワークショップを行い、子どもたちの創造力を探りたいと思います。ピアノに限定せず様々な楽器を取り入れて、子どもたちがどのようにして作品を構成し、それに対してどのような感想を持つのか、知見を得たいと思います。

### 参考文献

クルターク 遊びⅠ〔ピアノのために〕 中川一郎／ロナルド・カヴァイエ共訳 全音楽譜出版社 1989年

降矢美彌子 岩淵摂子 ハンガリーのピアノ教育の発アパジ・マーリア著『ピアノの夢—創造的なピアノ学習』の意義 帝京平成大学紀要 22(1) 2011年